

いつ時のこの爽かさ。

悲しき冬

郊外の狭き庭より、
合歡の葉ごしに透く
東京の黎明空の美しさ。

何処に幾千の家が倒れ、
何処に幾万の生命が断たれ、
何処に夜一夜焼けついた
幾十万の家があつたか。

空は澄み、和やかに
涼しく軽き小雲を浮かべ、
地上の蚊は、いま一つづつ
一すぢに昇天す。

(大正12年9月2日午前5時・令女界2-10)

「冷たく、白き編み棒に
黒きミネルバの毛絲かけて
この終日を編むは、なに？
——黒はよし、わが愛む彩」

「黒は、喪の彩。
かつ編むは、

この冬の日のわが肩かけ

わが住みし東京は今亡し。
十七のわが春秋を
育てし夢の跡も空しく、
この冬の、焼野の風は寒からめ。